

## 回顧十年

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-09-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小川, 賢之輔 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00025736">https://doi.org/10.14945/00025736</a>

## 回 顧 十 年

小 川 賢 之 輔<sup>\*</sup>

今を去る十年前、地学の振興と普及を目的に、静岡県地学会が発足した。初代会長佐々倉航三先生は、「静岡地学」創刊号の巻頭で、殊に「地学教育」と「地学研究」の進歩に寄与することを、本会の具体目標として示された。今、あらためて、発足 10 周年をふり返って、多くの感懐をおぼえる。

地学会発足にあたって、第 1 回の準備会が開かれたが、筆者は別件の公務出張のため欠席したので、その折りの討議内容や空気の詳細は知るよしもないが、集会に出席した大学の先生方や、創立総会にいたる準備段階では、本会創立に対する周囲の理解の状況は、それ程良好であったとはいえなかった。

まず、県教委に河井態治学校教育課長を訪ねて、本会の設立趣旨を説明し、理解と支援を求めた。これに対する解答は、「最近文部省では、教職員の各研究グループの活動を統合して助成しようとしており、これと逆行する分科独立グループには経済的援助ができない。殊に文部省は小・中・高を一環として考えており、大学を含めたグループは、文部省の構想外である。」ということであった。静岡県理科教育研究協議会会長中江齊氏からも、県教委とほぼ同様の解答があり、県小・中学校長会会長関厚氏からも、ほぼ同様な回答に加えて、「県理科教育研究協議会と摩擦を生じないように」と、1 本釘をさされた感じさえ受けた。この白眼視とさえ感じられる、「四面楚歌」の声を背負って、重い足を引きずりながら、佐々倉先生のお宅にこの始末を報告したのも、既に佐々倉先生が会長在任中御他界されたこともあって、遠い過去になってしまったような気がする。

しかしながら、この間に、会員は 113 人から、現在、念願をこえた 314 人に発展し、会誌静岡地学にのった、大小の話題、論説も 156 に達し、年会の研究発表 55・講演 11、それに、本部・支部の巡検会の見学会・講習会にいたっては、おびただしい数にのぼっている。この点、まことに、初期の目的が達成されている感が深く、本会が果たした実績が、決して低い評価にあまんずるものでないことを確信している。同時に、教育や研究を犠牲にして甚力されている、静岡大学の先生方を中心に、結成された本会の真面目が、世に問われつつある時限にあることを痛感する。同時に、本会創立当時、発展に多大な努力をばらわれた、竹内正辰・土隆一・鮫島輝彦・伊藤通女の各先生方および半田孝司氏の御苦勞に対しては深甚な謝意を表したい。

この 10 年間に、地学界の各分野の進歩にも著しいものがあり、人工衛星打ち上げ競争にはじまる、人類月面着陸・惑星探査船打ち上げ、地球上では、大洋底拡大説（プレートテクトニクス理論）および反論・地震発生と予知論争・火山活動と火成岩成因論、地史の絶対年代測定等々、地球物理化学的研究に、めざましい進歩をとげつつある。また、海洋底の研究は、既に、理論から開発へを飛躍し、その性質上、国際係争も発生しつつあるのが現状である。

また、自然災害に加えて、国内経済の成長がレジャーに反映し、国土開発は次第に乱開発方向に展開して、自らの手で、人類生存の根底を危くする災害を多発せしめつつある。これらの対策として、地域の自然科学的研究も真剣に考えはじめられてきたが、ここにあらためて、「自然科学的現象究明の基盤

\* 本会副会長

は、地質学的解明にある。」ことの認識を深める必要を痛感する。

しかしながら、地学に対するこれらの自然研究上の要請とうらはらに、地学教育（殊に高校）には著しい波があり、そのたびに関係者のなみなみならぬ苦心と努力がはらわれてきたが、現在ほどの地学教育存亡の危機は、かつて過去に見られなかった事態である。筆者は、他の教育界の諸現象についても、戦後の教育が壁に突き当たっていることを感じているが、地学教育は、今こそ、教科や教科課程の面で、再検討・再出発すべき、重大な危機に立たされていることを痛感する。

しかしながら、高校の地学が、選択教科として位置づけられたことは別として、地学教育の不振の一端は、地学教育担当者にもあるのではなかろうか。にくまれ口をたたくようで甚だ恐縮だが「静岡地学」の論文にも、地学教育の現場の究明を取り上げた論文は、きわめて少ない。会員諸君には、この方面にも一段とお骨折りを願いたいものである。

視点を変えて、本会の発展を会員の上から見れば、会員数は、本会創立当初から順調に増加しているが、退会者数も少くない。また行事参加者も、当初に比較して激減し、かつ定着しつつある。例えば、当初の巡検には、バスが満員で、何人かには遠慮してもらわなければならなかったのに、現在では、バスをチャーターする程の参加者は集まらない。また参加者の定着ということは、毎回参加者の顔ぶれが一定しているということで、地学の普及という点からは、意図と反した結果があらわれている。この事実は、本会発展に対する一つの壁であって、何等かの打開策がたてられなくてはならない。

これに関連する一つの意見として、校務が繁雑で余暇がないという。その点30-40年昔も、大差なかった。余暇を見出すためには、毎日それなりの計画と処理（実施）が必要であるし、能率アップの理論と技能、それに研鑽によって獲得された才能が必要である。また余暇というものは、時間的にそれ程長いものではないから、利用法の工夫と学問的な蓄積を豊かにするような技術が、やはり必要である。例えば、1日の見学が、その場限りで消えてしまうような参加のありかたは、単なるピクニック的レジャーに過ぎない。少くとも、見学がノートに蓄積され、それがまた発展するような工夫が必要である。筆者などは、記憶力がきわめて乏しいので、長らく市販の「コクヨ・ハ123」のルーズノートを愛用し、バインダーに分類整理することを実行している。

本会の他の行事についても、参加者の少ないことが淋しい。行事に参加すれば、必ず何かを得られるし、それはまた、学問的な興味に結びついてゆき、人生を知的に豊かにする。いわば、人生の幅と深さを拡大することになる。本会としても、例えば巡検・見学会を催す際は、なるべく多くの参加者があるように、目的地選定にあたってアンケートを求めたり、見学方法も、点から線・線から面と発展させたり、団体研究法を導入したりしている。しかしながら、また方法論的に未熟ということもあるであろうが、どうも充実し得ない現状である。その点、切角300人の会員を擁する本会の、各会員の躍動を期待してやまない。また、各会員の周囲の手近かな、同好の志が互に話し合ったり、連絡し合ったり、小集会をもったりすることも、決して個人の時を、むだにするものではないと信じている。

次に来る15周年や、20周年には、一層充実した発展が、本会に約束されることを期待するし、会の運営が、若い人達の手で、力強く発展することを念願している。